

研究主題

多文化・多言語の豊かさに触れさせ、自己肯定感を高めながら、日本語で授業に参加できる子の育成を目指して ～在籍学級を生きた学びの場にするための指導の追求～

1 顧問校長挨拶・部長挨拶



2 研修報告

○テーマ 「外国人児童生徒等教育の現状について」

講師 浜松市立新津中学校 奥山 麻紀子 教諭

現状	課題
・日本語指導が必要な外国につながる児童生徒数は、10年間で約2倍に増加。 ・公立高校に在籍する日本語指導が必要な外国につながる生徒数も増加。	・日本語指導が必要な外国につながる児童生徒のうち、1割程度が特別な指導を受けることができていない。 →「特別の教育課程」の制度化 ・公立高校の中退率が高い。 →高校における「特別の教育課程」の制度化

文化間を移動する子供たちの困難に寄り添う。子供の実態を把握して、指導計画を立て、日本語指導を行う。

＜津市立東橋内中学校の視察を通して＞

- 1 外国につながる生徒にとって「わかりやすい」＝すべての生徒にとって分かりやすい
 - ・ 充実した日本語指導（きずな教室→国際教室→必要度、困り感に応じて入り込み支援）
 - 2 デジタル教科書、WEB教材、タブレット等の活用
 - ・ 視覚的教材の活用で、日本での経験不足、日本語の能力不足を補う
 - 3 話し合う環境の育成
 - ・ 分からないことを「分からない」と言える雰囲気
- ◎「ネットワーク」「フットワーク」「チームワーク」が大切。
教師の「協働」がすべての生徒の成長につながっている

3 情報交換会

- 初めて外国人指導担当になり、仕事の内容が分からない。前年度の担当者からの引継ぎ資料や口頭での伝達がなく、困っている。→指導や報告文書作成の記録を残したり、連絡を取り合ったりして、確実に指導や提出書類等の引継ぎを行う。
- 進路についての面談等の重要性が保護者に伝わらない。→「進路について語る会」等の紹介。機会をとらえて、保護者との会話を重ね、信頼関係づくりに努める。



4 指導助言

浜松市教育委員会指導主事 江間 成昭氏

外国につながる子供たちは、学校や在籍学級に居場所があり、自己肯定感が高まるとともに、学習に向かう姿勢、学習意欲も高まっていくと考えられる。

「シンプル」「ビジュアル」「シェア」（アウトプット）を大切に、日本語指導に取り組みたい。



5 にじ教室の見学

